

# 縄文時代晩期

福田友之

昭和55年の当センター設立以降、平成11年までの間、県内では県や市町村教育委員会によって、晩期(亀ヶ岡文化)の遺跡調査が多数行われた。それらのなかで、おもに県教育委員会が行った調査事例を中心として紹介し、それぞれのもつ成果について述べる。

## 竪穴住居跡

県内の晩期住居跡は、昭和54年までは数例のみの発見であったが、この20年間に多数追加された。

まず、昭和55～58年に、東北縦貫自動車道八戸線の建設に先立ち当センターが調査した南郷村右工門次郎窪遺跡(昭和55年調査)では、晩期前葉～中葉の円形竪穴住居跡が4軒と晩期の土坑が<sup>(注1)</sup>発見され、また、同じく南郷村の三合山遺跡(昭和55年調査)では、晩期の円形竪穴住居跡が2軒と晩期前葉(大洞B式期)の土坑が<sup>(注1)</sup>発見された。また、八戸市鴨平<sup>(注1)</sup>(2)遺跡(昭和56年調査)では、晩期の円形竪穴住居跡が1軒発見された。<sup>(注2)</sup>また、八戸市牛ヶ沢<sup>(注2)</sup>(3)遺跡(昭和57年調査)では、A地区から晩期の竪穴住居跡が3軒、C地区から1軒発見された。いずれも円形で晩期中葉(大洞C式期)のものである。C地区からはほかに同時期のフラスコ状土坑も3基発見された。<sup>(注3)</sup>また、南郷村石ノ窪(2)遺跡(昭和58年調査)では、A区から晩期中葉(大洞C式期)の円形竪穴住居跡が3軒と晩期前半(大洞B～BC式期)のフラスコ状土坑が3基発見され、B区からは晩期中葉(大洞C式期)のフラスコ状土坑が13基発見された。<sup>(注4)</sup>また、平成2・3年に、八戸平原開拓建設事業(畑地造成)に先立ち県文化課が調査した八戸市沢堀込遺跡では、A区から後期末～晩期初頭の竪穴住居跡が10軒発見された。円形・楕円形を主とする直径3～4m前後の規模のものである。また、この地区からは後期末～晩期初頭とみられる土坑も31基発見された。<sup>(注7)</sup>また、平成3・4・6年に、県道櫛引・上名久井・三戸線道路改良工事に先立ち当センターが調査した三戸町泉山遺跡では、晩期終末(大洞A'式期)の竪穴住居跡が1軒、晩期中葉の掘立柱建物跡が1軒、土坑が23基、焼土が2基、さらに晩期前半(大洞B～BC式期)の環状列石の一部(幅3～8m、長さ28m)も発見された。この遺跡では遺構内外から晩期の遺物が多数出土し



とくに土偶破片が多く出土し、132点にのぼっている。また、石器・石製品も豊富で、穿孔途中や製作時に破損した玉類の出土は、製作工程を示すものとして注意される。また、平成5年に、主要地方道屏風山・内真部線道路改良工事に先立って当センターが調査した金木町千苅<sup>(注12・13)</sup>(1)遺跡では、晩期の円形竪穴住居跡が3軒発見され、うち1軒は直径約11.8mの大型住居跡であった。ま

遺物出土状況(三戸町泉山遺跡) た、晩期中葉の土坑墓も1基発見された。注目すべき遺物としては晩期中葉(大洞C式期)の土製仮面が1点ある。<sup>(注11)</sup>また、平成8年に、八戸平原開拓建設事業(世増ダム建設)に先立って当センターが調査した南郷村水吉遺跡では、晩期前葉(大洞B式期)の竪穴住居跡が1軒発見された。<sup>(注14)</sup>また、平成9年に、県営津軽中部広域農道建設事業に先立って当センターが調査した弘前市十腰内<sup>(注14)</sup>(1)遺跡では、晩期初頭(大洞B式期)の円形竪穴住居跡が2軒発見された。1軒は直径1.5mという非常に小型のものであるが、他の1軒はこれとは対照的に推定径13mほどの大型

住居跡である。また、晩期とみられる土坑墓も1基発見された。このほかに、2ヶ所の遺物集中地点(大洞BC～C<sub>1</sub>式・大洞C<sub>2</sub>～A式期)からは、土偶・土製耳飾り・円盤状石製品などの遺物が多数発見された。黒曜石の石器15点の産地分析結果は、すべて地元の出来島産であった。<sup>(注15)</sup>この遺跡は平成11年に、当センターが隣接区域を調査し、晩期前半の小型円形竪穴住居跡が5軒発見された。



大型住居跡(弘前市十腰内(1)遺跡)

これらのほかに、県内では各市町村教育委員会による住居跡調査例もある。昭和58・59年に青森市教育委員会が調査した長森遺跡では、晩期中葉の円形竪穴住居跡が3軒発見され、さらに、昭和62年に八戸市教育委員会が調査した八幡遺跡では、後期末～晩期初頭の円形竪穴住居跡が2軒発見された。<sup>(注19)</sup>また、昭和61・62年に小泊村教育委員会が調査した縄文沼遺跡では、晩期中葉(大洞C<sub>1</sub>～C<sub>2</sub>式期)の竪穴住居跡が3軒発見されたが、隅丸長方形である点が特徴的である。<sup>(注20)</sup>そのほか、平成5年に八戸市教育委員会が調査した是川中居遺跡では、後期後葉～晩期の円形竪穴住居跡が2軒発見された。<sup>(注26)</sup>また、平成9・10年に階上町教育委員会が調査した滝端遺跡からは、後期後葉～晩期前葉の円形竪穴住居跡が15軒発見された。ここでは、土坑墓も発見されており、本県初の抜歯のある人骨が確認された。<sup>(注27)</sup>

以上のように、この20年の間、多数の竪穴住居跡の新資料が追加された。時期は晩期初頭～末葉の各時期のものである。これによって、従来、資料的な制約もあって積極的な研究が行われてこなかった本県の晩期住居跡は、時期ごと・地域ごとの形態・構造の違い、さらに時期的な変化も少しずつとらえられる状況になってきた。また、泉山遺跡の調査では、掘立柱建物跡も発見されており、今後の晩期の遺跡調査を行う上で参考とすべき遺構となった。

## 土坑墓

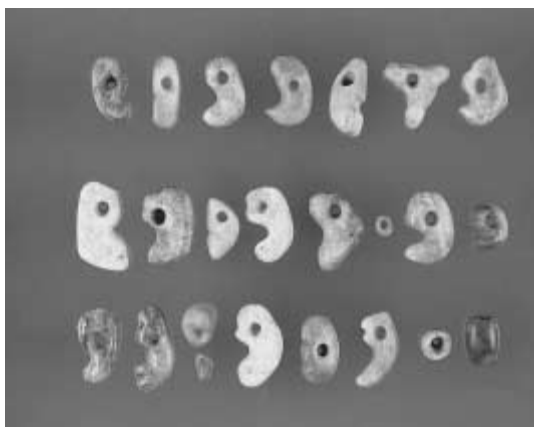
県内晩期の墓は、昭和54年までは数遺跡の発見しかなかったが、この20年間に多数追加された。

まず、昭和61年に、むつ小川原開発事業に先立って文化課が調査した六ヶ所村上尾駸(1)遺跡C地区<sup>かみ お ぶら</sup>があげられる。晩期中葉(大洞C<sub>1</sub>～C<sub>2</sub>式期)の土坑墓が20基発見され、長楕円形・円形・隅丸長方形の形態がある。16基からは赤色顔料が確認され、4基からはヒスイ(硬玉)などの玉類がついた鉢巻き状装身具が発見された。装身具としては玉類が圧倒的で、13基から計766点以上も出土した。緑色凝灰岩<sup>ぎょうかい</sup>が主体であるが、ヒスイが90点以上も含まれており、産地分析結果ではほとんどすべてが糸魚川産であった。<sup>いと い がわ</sup>

また墓域からは、晩期中葉の鼻曲り土面も出土し、注目された。<sup>(注28)</sup>また、平成2～4年に、新青森変電所新設に先立って当センターが調査した青森市朝日山(1)遺跡では、晩期の土坑が、円形・楕円形あわせて450基も発見され、そのなかに土坑墓とみられ楕円形の土坑が約170基以上も含まれている点が注目された。晩期初頭～中葉の土坑墓群が、丘陵頂部から尾根上にかけて分布するという特異な立地を示し、しかも県内他遺跡の土坑墓にくらべて深いという点で注目された。



鼻曲り土面(六ヶ所村上尾駸(1)遺跡)



ヒスイの玉類(青森市朝日山(1)遺跡)

内部には玉類が副葬されたり、赤色顔料が残っている例もあり、17基からはヒスイを含む玉類が37点出土した。<sup>(注9・10)</sup>このほか、昭和55～57年に、学術調査の一環として、県立郷土館が調査した国史跡・木造町亀ヶ岡遺跡では、雷電宮地区から晩期中葉とみられる土坑墓が24基発見され、<sup>(注16)</sup>江戸時代以来長い研究史をもつこの遺跡としては、はじめての遺構発見となった。

これらのほかに、県内市町村教育委員会による土坑墓調査例もある。昭和58年に十和田市教育委員会が調査した<sup>まがたま</sup>明戸遺跡(晩期中葉)からは、ヒスイ勾玉とともに<sup>ぎょうがくつ</sup>仰臥屈位の人骨が1体発見された。<sup>(注22)</sup>また、昭和58・59年に青森市教育委員会が調査した長森遺跡でも、晩期中葉の土坑墓が3基発見され、2基からは<sup>(注24)</sup>歯も発見された。また、前に述べた八戸市八幡遺跡では、晩期前半の土坑墓が5基発見され、4基から右側臥屈位1体(性別不明)・仰臥屈位3体(成人男性2・成人女性1)の人骨が発見された。しかもこのうちの1基には成人男女2体が仰臥屈位で<sup>(注19)</sup>合葬されていた。このほか、昭和61・62年に小泊村教育委員会が調査した縄文沼遺跡では、赤色顔料・装身具は確認されなかったものの、石鏃を多数出土した、土坑墓とみられる例も発見された。また、平成5年に八戸市教育委員会が調査した<sup>これかわなか</sup>是川中居遺跡では、後期後葉～晩期の土坑墓が9基発見され、一部から赤色顔料(水銀朱)や粉末状になった人骨が発見された。<sup>(注26)</sup>人骨はほかに、平成5・6年に三厩村教育委員会が調査した<sup>(注25)</sup>宇鉄遺跡で、晩期後半の土坑墓から成人男性人骨が1体分発見された。

以上のように各遺跡で、土坑墓が多数発見されたこともこの20年の成果として注目される。しかも上尾駸(1)・朝日山(1)遺跡のように、広範囲にわたる調査事例が多かったことも特色である。ただし、人骨の発見が少ないことや、土器のような年代を示す副葬品がきわめて少ないために、年代が不明の墓も多い。しかし、一連の調査によって、玉類などの各種副葬品が多数発見され、当時の埋葬方法・墓制を知るうえで、多くの資料が追加されたことが注意される。このなかで、一つの土坑墓群のなかで、ずば抜けて副葬品が多い土坑墓(上尾駸(1)遺跡C地区の第35号土坑からは、糸魚川産ヒスイを50点以上も連ねた首飾りが出土した)は、被葬者のおかれた社会の階層性の一端を示唆するものとして、その後の社会構造に関する論議に発展している。また、土坑墓が発見された遺跡でも、同時期とみられる住居跡が少しずつ発見されている。住居跡と墓は、晩期の集落構成を知るうえで、基本的な資料であり、今後の集落研究に必要な基礎資料が多数蓄積されてきている。

本県の土坑墓から多数発見される玉のうち、ヒスイの産地分析によって、上尾駸(1)遺跡出土の玉は、ほとんどすべてが遠隔地の糸魚川産のものであることが判明した。従来から、本県の晩期にはヒスイが多いことが指摘されていたが、産地から遠く離れた本州北端の本県域に、東北他県域に比べて、はるかに多くのヒスイがもたらされていたことが、この調査を契機として具体的に判明して

屈葬人骨  
(十和田市明戸遺跡)



(注30) きた。これは、双方両地域の交流の結果によるものであるが、ヒスイをより多く入手しえた本県の亀ヶ岡文化の特性があらためてクローズ・アップされた20年でもあった。

#### 出土遺物

県内の晩期遺物包含層も各地で調査が行われ、各種の遺物が多数出土した。

まず、昭和59年に、国道280号道路改良工事に先立って当センターが調査した平館村今津遺跡では、晩期中葉(大洞C<sub>2</sub>式期)の土器、天然アスファルト付着の石器のほかに、土偶・土版・土面等の土製品、岩版・石剣・石棒類などの石製品が出土した。また、この遺跡は製塩土器が多数出土した点でも注目された。海水を煮詰めるための平底の粗製土器で、器形・大きさ・製作技法がわかる好資料である。しかし、この遺跡でほかの何よりも注目を集めたのは、中国古代の「鬲」に類似した壺形土器で、底部に袋状の太い足を3本もつ「鬲状三足土器」の出土であった。この型式の土器は、形態が明確な



鬲状三足土器(平館村今津遺跡)

ものは現在4個体あり、いずれも本県から出土しているが、出土状態がわかるのは本例のみである。この土器について、大陸と何らかの文化的関わりをもつものかどうか、その出自・系譜の問題が日中双方の研究者に注目され、議論が行われている。(注31～34) この問題は、簡単には決着しそうもないが、本県の亀ヶ岡文化研究が抱える宿命的な課題を再認識させる調査でもあったと言えよう。また、平成3年に、一級河川岩木川水系支川うしろながねがわの後長根川改修工事に先立って当センターが調査した

弘前市野脇遺跡では、晩期初頭～後葉の土器・石器のほかに、土偶・岩版・ヒスイなどが出土した。(注8) これらのほか、昭和58年に、学術調査の一環として県立郷土館が調査した名川町剣吉荒町遺跡では、晩期終末(大洞A'式期)の好資料、また、平成5～7年に同館が調査した馬淵川流域の晩期遺跡では、三戸町杉沢・福地村姥渡の両遺跡から晩期前半の遺物が出土した。(注18)

晩期の遺跡ではこれらのほかに、県内市町村教育委員会による調査例があり、昭和55年に横浜町教育委員会が調査した松木遺跡では、ホオジロザメの歯の垂飾品が出土した。(注21) なお、製塩土器は、階上町滝端遺跡で、県内では従来みられなかった晩期中葉の尖底にちかい形態のものが出土している。(注27) また、昭和58～平成3年に五所川原市教育委員会が継続調査した観音林遺跡では、晩期の土偶・岩偶の好資料が出土し、前に述べた滝端遺跡でも土偶の好資料が出土した。(注23) (注27) これらの土偶・土製仮面等の呪術関連資料は、亀ヶ岡文化にとくに顕著な遺物であり、今後の研究上、不可欠なものとなった。

(青森県埋蔵文化財調査センター総括主幹)